

第33回 防災カフェを開催しました。



西日本豪雨！

～なぜ人々は避難しなかったのか？～

ゲスト：川見 文紀 さん 藤本 慎也 さん

(同志社大学 社会学部 社会学科)

日時：2019年2月13日(水) 18:30～20:30

場所：滋賀県危機管理センター1階 エントランスホール

ファシリテータ：教授 立木 茂雄 さん

(同志社大学 社会学部 社会学科)



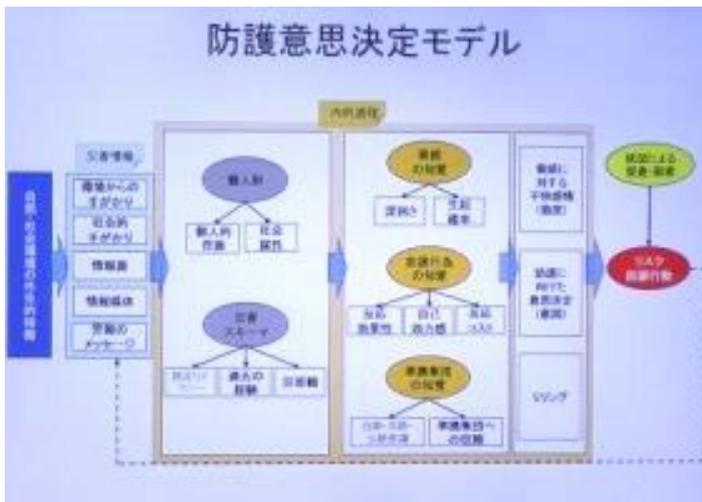
川見さん、藤本さん、立木さん

災害情報を実際の避難行動に繋げるにはどうすればよいのかについて、調査結果をもとに災害情報と避難について一緒に考えました。

第9回と第21回の『防災カフェ』で神戸での調査結果から災害経験者や防災リテラシーの高い人は、防

災対策や避難などの行動への意識が高く、さらにリスク情報を得るほどその割合が高くなっていること、そうでない人は災害などのリスク情報が一定以上になると、防災対策や避難などの行動への意識が低くなり、対策を諦めてしまう傾向があるというお話がありました。災害経験がなくても防災リテラシーを高めることで、防災への適切な意思決定ができるということでした。防災リテラシーは、防災訓練や防災キャンプなどの防災に関する体験によって高めることができるということでした。

さて、今回、2018年12月に大分県の三つの市の土砂災害警戒区域の人々を対象に行った2012～2017年までの土砂災害の際の避難の状況の調査結果(1934人が回答)をもとに、どのように実際の避難行動につながる意思決定をしたのかについての話を聴きました。災害情報を受けて、実際に何らかの避難行動をした人は日田市(53.7%)中津市(49.3%)、津久見市(40.3%)でした。



調査結果から何が実際の避難行動と深くかかわっているのかの説明を聞きました。

調査結果を防護意思決定モデルに当てはめ、災害情報の種類や心の動きなどの要因の影響の大きさが調べられました。要因は災害情報などの外的なものや情報などによる心の動きなどの内的過程に分けられます。

まず、様々な要因が直接的に(1:1で)意思決定にどのくらい影響しているかを調べました。結果として、外的なものでは「災害警戒区域にある」「情報が多い」こと、情報源では「身近な人」「防災行政無線」からの影響が大きいという結果になりました。内的過程では、「災害経験」や「高い防災リテラシー」があることといった『災害スキーマ』や、「深刻な被害の可能性が高いと考えた」、「災害が恐ろしいと感じている」といった『脅威に対する不快感情』や「避難によって身を守れると考えた」、「避難を負担と感しない」といった『防護行為の知覚(身を守るためのベストな行動とか何か)』や「避難の手助けをお願いする人がいた」といった『状況による促進・阻害』の影響が大きいという結果になりました。

しかし、私たちは、実際には様々な要因が複雑に絡み影響し合った中で意思決定をしています。そこで、防護意思決定モデルの各要因がどのように影響し合っているかを因果連鎖モデル(原因と結果の関係をより詳細に調べる方法)を使って調べていきます。まだ解析途上ということですが、現時点で分かっていることは、リスク回避に直接関係しているとした『災害スキーマ』、『状況による促進・阻害』、『防護に向けた意思決定』の中では、『防護に向けた意思決定』の影響が最も大きいという結果になりました。この『防護に向けた意思決定』に一番大きな影響を与えているのは、周囲の人達の様子を見て、家族や近所と相談してという『ミリング』であることが分かったそうです。『状況による促進・阻害』では、「同居者に避難意志がない」ことがマイナスに働き、「要配慮者がいる」ことはプラスに働くという結果になりました。そのなかでももっとも影響を与えていたのは、やはり「避難の手助けをお願いする人がいた」ことでした。

人間の思考システムには、速い思考(直感的思考)と遅い思考(熟考)の2つがあり、防災

人間の思考システムには、速い思考(直感的思考)と遅い思考(熟考)の2つがあり、防災

教育の結果、緊急地震速報によって、直ちに机下に入るようになるのは前者によるものですが、『災害スキーマ』はこのような行動を促していたということもわかりました。

わかったことをまとめると、①リスク回避行動に直接かかわっているのは、『防護に向けた意思決定』、『状況による促進・阻害』、『災害スキーマ』である。②『防護に向けた意思決定』を高めることに最も大きく関係しているのは、『ミリング』である。③『状況による促進』のうちでももっとも大きく行動に影響しているのは「避難の手助けをお願いできる人がいる」ことである。④速い思考により素早く避難するためには、『災害スキーマ』が必要である。ということができます。

特に②について、避難行動は個人の行為のように思われますが、今回の研究からもそうではなく、『避難行動というのは社会的な行為でもあるということ』がわかります。

④について『災害スキーマ』は行動と直結しているので、滋賀県で実施されている通学合宿や防災キャンプは、「防災リテラシー」を高めるために効果があるということがわかっているのです。良い取り組みだということができます。子どもたちだけでなく大人でも『災害スキーマ』につながる脅威の理解、備えの自覚、咄嗟の行動への自信を普段の防災訓練などの中で工夫して高めるようにすることが望まれるということでした。

参加者からは多くの質問がありました。その一部を紹介します。

問：学校教育の場以外で防災リテラシーを高める取り組みはありますか？

答：ここ3年間、大分県別府市で障害のある方の災害時の個別支援計画作りに関わってきました。障害者の方が地域の避難訓練に繰り返し参加することで、咄嗟の行動への自信などが高まりました。想定される被害について話し合っ理解する中で、参加者間に人間関係ができ、要配慮者の方が、自分から助けを求められるようになる。さらに、ケアマネー



会場の様子

ジャなどの専門職にも関わって、一人ひとりの災害時版のケアプランを作るというふうなことで障害のある方の防災リテラシーが確実に高くなることがわかりました。

川見さん、藤本さん、立木さん、参加者のみなさん ありがとうございました。